

## はしがき

---

たとえばカルディや成城石井やコストコ。普通のコンビニやスーパーでは売っていない、ちょっと変わったアイテムをそろえるこうした店舗が、気づけばあちこちで増えつつある。コンビニ的なものが自明のベースになっている都市的な消費環境のなかで、非コンビニ的に少しずらしたものが、いわばコンビニ的に増殖しつつある現在、私たちが都市空間に感じるリアリティはどのように変容しつつあるのだろうか。

本書は、複製的な消費環境が拡張する状況を「無印都市」と名づけ、その空間と経験のあり方をあえてポジティブに描き出そうとした、前作『無印都市の社会学』（2013年）の企図を引き継ぎつつ、扱うトピックを更新したものである。それは、本書の問題設定を、現代の若者世代にとっての「あるある」に近似させようとする試みであると同時に、「無印都市」それ自体が別のフェーズに入りつつある、その現状を追いかけてようとする試みでもある。

「無印都市」という対象にせまるための方法として、本書では「フィールドワーク」を掲げている。あくまで個別的な現場に出かけてみて、その空間の具体的な手触りを考察の出発点にするという基本スタンスを、本書では「フィールドワーク」と表現している。

本書はまた、社会学を学ぶ大学生のために、身近な現象を「社会学する」やり方を指南するテキストでもある。社会学者たちの「模範演技」を物量作戦的に数多く用意することで、読者が興味ある部分をつまみ食いの的に読んでいううちに、知らずしらず社会的アプローチの勘所をつかめるようになればよい——テキストとしての本書（および前作）は、このような方針をとっている。

本書の各章は、4部構成からなる共通のフォーマットをもつ。それらは研究の大まかな流れを示しており、読者がレポートや卒論をまとめるときにも、この流れが参考になるだろう。それぞれの節のタイトル部分には特定のアイコンが登場するので、各々の意味合いを説明しておこう。

## でかける

まずは現場に出かけてみた、という体裁で、対象となる空間の様子や、そこでの経験や感覚を描き出す。その空間からえられる妙な高揚感、何となく惹きつけられる感じ、ふと気づくこと、戸惑い、違和感、等々。そのような身の丈の感覚の描写を入口に、社会学的な記述と分析のとっかかりを探る。

## しらべる

対象となる空間や事象について、歴史的経緯や社会的背景の説明など、少し引いた視点から位置づけや文脈づけをおこなう。そのうえで参与観察やインタビュー、新聞や雑誌記事の収集、等々、さまざまな手法を用いて、対象の分析と考察に必要な客観的なデータをそろえてゆく。

## かんがえる

対象となる空間や事象について、社会学的な分析と考察をおこなう。類型化をほどこしたり、類似した事象との比較を試みたり、等々、各執筆者の持ち味を生かしたかたちで、自由に議論を展開する。

## ふりかえる

全体のポイントをまとめると同時に、対象となる空間や事象の記述と分析から引き出される社会学的な含意を示唆する。

## もっとかんがえる

学生のためのヒント集。同じ対象について、他にもおもしろい議論が展開できそうな目のつけどころや、他のアプローチの仕方の例などを示す。

さて、前置きはこれくらいにしておこう。それではさっそく、どこにでもある空間を「社会学する」フィールドワークの数々に、読者のみなさんにも同行いただくことにしよう。

※なお、各章タイトルの背景に入っている写真は、それぞれの章の執筆者がフィールドワークに出かけた現場で撮影したものである。

近森 高明